マダガスカル

現状と今後の観光産業の可能性について

山﨑 和加代

目　次

はじめに 145
1. マダガスカルの現状 146
2. その豊富な観光資源 149
3. 今後の課題と可能性 156
おわりに 159

はじめに

マダガスカルと聞いて，何が頭に浮かぶだろうか？「なんか変わった動物」「星の王子さまに出てくる大きな木が生えてるとこ」「アフリカのガラパゴス」「ハリウッド映画」「ジャングル」「島」「シーラカンスが近くで発見されたとこ」実に様々なイメージが語られる。しかし，実際にどんな人が住んでいるのか，何語を話してるのか?，などと，具体的に尋ねてみると，「えーと，黒人?」「……マダガスカル語ってあるんだっけ？」と途端に言葉が少なくなってしまう。そして，「通貨はアリアリって言うんだけど」となどと言おうものなら，「え～，何それ?？ そんなの聞いたことないよ！」と非難めいた声まで上がる始末である。

マダガスカルはアフリカに位置し，経済的にも政治的にもアフリカに属する。だが，その祖先の多くは遥か昔に海を渡ってやってきたアジア人であり，その生活や文化において，アジアとの共通点も多い。世界で唯一のアジアンアフリカ国家とも言える。そのユニークさを紹介していきたいと思う。

1. マダガスカルの現状

マダガスカルはアフリカ大陸の東，インド洋に浮かぶ面積587,041平方キロメートル世界で4番目に大きい島である。日本の面積，377,750平方キロメートルと較べると約1.6倍。想像していたより大きいと感じるのではないだろうか。それに対し，人口は2,190万人（2012年ＵＮＦＰＡ）と，日本の1億2,805万人（2010年国勢調査）に対し，約6分の1である。そして，人口のもうひとつの特徴として，人口比のうち，若い世代が占める割合が高い。2012年発表のＷＨＯの世界保健統計によれば，マダガスカルにおいて，15歳以下の世代が占める割合は全人口の43%（195ヵ国中21位）。実に国民の半分近くが15歳以下なのである。また，平均寿命が68歳（195ヵ国中136位）からも想像できるが，60歳以上の世代が占める割合は低く，全人口の５％（195ヵ国中147位）しかない。ご存知のように日本は世界一の長寿国で平均寿命は83歳。60歳以上の世代が全人口に占める割合は31%。我が国では国民の３人に１人が老人（と言っても日本の60代は非常に若くて元気だが）なのである。それと較べてみると，いかにマダマダガスカルという国が若い世代で構成されているかわかる。

経済面においては世界銀行からも世界の最貧国のひとつと名指しされているように，マダガスカル国民の殆どが非常に困窮している。ＧＮＩ（旧ＧＮＰ）を比較すると日本が34,890ドルであるに対し，マダガスカルは430ドルと，なんと日本の81分の1である。また，世界銀行の別のデータによれば，マダガスカル国民の94%が1日2ドル以下で生活をしている。この2ドルは食費だけでなく，生活費すべてが入った金額なのである。その貧しさの度合がおわかりいただけるであろうか。

首都のアンタナナリヴを歩いてみると，街を歩く子供たちの多くが裸足であるのがわかる。先進国の首都ではありえない光景である。また，外国人と見ればこちらに手のひらを伸ばして群がってくる。歩くほどにその数が増え，恐怖を感じた観光客が投げるように1人に紙幣を渡して，子供たちが取り合っているうちに逃げるようにその場を立ち去る様子も見かける。ローマやパリでロマ（ジプシー）の子供たちに囲まれた経験がある旅行者も多いかと思うが，アンタタナリ

写真 1　土産物屋で仲良くなった女の子

（注）写真の女の子はこの1ヵ月後に亡くなりました。

ヴのそれは，もっと年齢層が低く，もっと数が多い。また，ロマがその街に定住していないのに対し，マダガスカルの子供たちはそこで暮らし，その街の住人であるのだ。ロマが定住する場所を持たず，社会からはみ出している存在であるのに対し，彼らは住民としてその街で暮らしながら同様の行動をとっている。その様な彼らの行動を見咎め，良くないことと諭す大人の姿をついぞ見かけたことがない。唯一，モロンダバのバオバブが見られる観光名所で小銭をねだる子供たちに注意をしている観光ガイドに出会ったことがあるが，それは，そのような子供が観光客を煩わせることによって，自分の商売に影響が出るのを恐れての行動であったように思う。誰もが少しでも多くの現金を得ること，生きぬくことに必死なのである。「貧すれば鈍する」というのはこういうことかと，貧困がモラルや品性を駆逐していくのを目の当たりにし，ただ驚くばかりである。

もともと，マダガスカルは国家予算の半分を外国からの援助に頼るという構造であったが，前大統領ラヴァロママナが強いリーダーシップを発揮し，積極的な経済運営を行ったことから，経済は堅調な成長を維持していた。ラヴァロママナ大統領は2002年に一時落ち込んでいたマダガスカル経済を翌2003年に著しく回復させた後，2004年から2008年にかけ毎年約5％の成長率を堅

持することに成功していた。そのまま，繊維業，観光業，鉱業を経済の牽引役とし，経済成長を維持していけばよかったのだが，2008年，政府は韓国の大宇グループにマダガスカルの全農地の過半となる130万ヘクタールを99年間無償で貸借する協定を締結するという失策を冒す。これについては国連食糧農業機関（FAO）ジャック・ディウフ事務局長も，「“新植民地”システムを作り出す恐れがある」と警告するほどであったが，全世帯の81%が農業に携わるマダガスカル国民にとっては生活に直結するより切実な問題であった。結局，この失策によって反政府運動に拍車がかかり，2009年のクーデターへと向かっていってしまったのである。

クーデターによって誕生した政権について国際社会の対応は厳しい。AU（アフリカ連合），SADC（南部アフリカ開発共同体）は，マダガスカルの参加資格を停止したほか，日本を含む主要援助国は，人道・緊急支援以外の新規援助の停止を決定した。その結果，マダガスカル経済は停滞が続き，経済成長率は2009年のマイナス0.4%から2010年にはマイナス7.18%へと悪化している。これを打開するには一刻も早い選挙による大統領選出が必要であるが，国際社会による調停努力も空しく，ラジョエリナ暫定大統領派とその他3派の対立が激化，未だ実施されていない。（2013年8月現在）

2012年3月から2013年8月までに4回マダガスカルを訪れたが，この1年半の間に実感するほど経済はより悪化している。本来なら小学校に行っている時間のはずなのに，街で外国人に施しをねだる子供が増えているし，空港には「18歳以下の少女の買春は違法です」という標語が英語とフランス語で書かれ，ベッドの上で悲しそうに目を伏せる少女のポスターがあちこちに貼られている。日本なら中学生ぐらいの年頃の少女たちが，日が暮れると外国人客が多いバーやホテルの近くに集まってくる。薄汚れた安っぽい服から必要以上に露出したやせた手足が痛々しい。もし，日本に生まれていたら，制服を着て，毎日学校に通って同級生と笑い転げていることだろう。何という違いであろうか。

2. その豊富な観光資源

(1)動 植 物

2009年のクーデター以降，政治・経済の危機的状況により観光客は減少しているが，自然好き，世界遺産好きの日本人にとってマダガスカルはとても魅力的な国である。よく大陸から隔絶されてきたために独自に発達した固有種の多い島の代表として，ガラパゴス島が挙げられるが，マダガスカル島は固有種の豊富さはその比ではない。2009年に出版された『マダガスカル島』（小山［2009］）によると，12,000種の植物（そのうち約85%がマダガスカル固有種），143種の魚類（そのうち93種が固有種），346種の爬虫類（そのうち314種が固有種），283種の鳥類（そのうち107種が固有種），177種の哺乳類（そのうち165種が固有種），199種の両生類（固有種の数は不明），無脊椎動物にいたっては固有種は不明だが（というより多すぎて数えきれないのであろう），約10万種は下らないとされている。世界でここでしか見られないもの。観光資源としては非常に魅力的な存在である。

マダガスカルの数多い固有種のうち，最も有名なのはバオバブであろう。何しろ，世界で８種しか確認されていないバオバブのうち，６種がマダガスカルの固有種である。バオバブはサン＝テグジュペリ著『星の王子様』によって世界中に知られることになった木である。作中では芽が出たらすぐに抜いてしまわないと，あっと言う間に巨大化して星を占領してしまう厄介者の木として描かれている。だが，厄介者として描かれているにも関わらず，そのぽってりとした形はとても読者を魅了する。大抵の木は大きくなると，幹だけでなく，枝もそれに応じて伸びてくるものだが，バオバブの枝は幹の大きさに較べるとまるで宿り木か鳥の巣のようにモシャモシャと申し訳程度に付いている。また，『星の王子さま』の中の挿絵より，実際のバオバブはもっと幹がぼってりと大きく，幼稚園児が初めて描く木の絵のようだ。その絵がスケッチブックから抜けだして来て，巨大化し，草原に立っているように見える。

バオバブはその巨大さにおいて他の植物を圧倒している。高さは約20メートル，直径は約10メートルにも成長する。20メートルと言えば，ＪＲの在来線

1両の長さである。車両を全部，空に向かって立てた高さを想像していただきたい。10メートルは大人が6人手をつないだ長さと考えるとわかりやすいであろう。強風で倒れて大騒ぎになった鎌倉の鶴岡八幡宮の銀杏の木と同じくらいの大きさである。

そして，その形のユニークさや巨大さという見た目だけでなく，実際のバオバブの木はとても役に立つ木なのである。白色のぽってりとした大きな美しい花をつけ，果実は食用になる。その実の含むビタミンCはオレンジより多く，カルシウムも牛乳より多いと言われている。実はグレープフルーツ大の茶色のスエードような表皮に覆われた殻に詰まっており，椿のようなタネの周りに白い果肉が付いている。8月に現地を訪れた時には乾季であったせいか，果実は乾燥しており，タネの周りについている綿状の果肉を口の中で転がすように舐めるというような食し方であった。味は酸っぱく，清涼感はあるが，「果物」のイメージからはほど遠いものである。種子からは油が採集でき，若葉を野菜として利用できる。地中深くまで伸ばした根からは大量の水を吸い上げることができ，10トンもの水を貯めておくことができる。野生動物はそれを知っているので，アフリカ大陸では，ひどい渇水の時に水を求めて象がバオバブの木を倒してしまうのが問題になっているくらいである（幸いなことに，マダガスカルにはバオバブを傷つけるような巨大な野生動物は存在しない）。樹皮は煎じて解熱剤に用いられるほか，細かく裂いて編めば強靭なロープを作ることもできる。そして，成長するにつれ，幹が空洞になっていくことが多いので，人が住むこともできる。南アフリカのファームでは敷地内に生えている巨大なバオバブの空洞にバーを作り，毎日とても賑わっているそうである。

たった1本であっても，それほどの巨木に育つのは珍しい。もし，それが日本で神社仏閣に生えていた場合，白いしめ縄を巻かれて神木として大切にされる。しかし，マダガスカルでは特に特別扱いされている様子もなく，ごく，当たり前のように，そのような巨木が何本も，時には何十本もニョキニョキと生えているのである。しかも，日本では屋久島や白神山など，神社仏閣以外で巨木の生えているところは森林地帯で周りも大小様々な木で埋めつくされているが，バオバブは他に大きな木が見当たらない草原にバラバラと独立して生えている。まる

で誰かが違うところから持ってきて気まぐれに植えたかのようなのである。

現地の人たちがバオバブ・アベニューと呼ぶモロンダバのバオバブ群生地では，道の両側の草原に数十本のバオバブが生えている。1本だけでも見事であるのに，何十本もの巨大なバオバブが立ち並ぶ様は圧巻である。そして，ブルーから紫に変わっていく夕暮れ時の空を背にした姿は幻想的で他では絶対に見られない風景であり，言葉を発することさえ忘れてしまうほどである。バオバブは年輪がないため，その樹齢を調べるのは難しいが，1年に5ミリしか成長しないことを考えると，バオバブ・アベニューのバオバブは樹齢1,000年以上であるようだ。南アフリカにある世界最大のバオバブの木を放射性炭素で年代を測ったところ，樹齢6,000年であったので，間違いはないであろう。1,000年前と言えば，日本では紫式部が源氏物語を奏上した平安時代であるし，ヨーロッパではソロモン王やダビデ王の時代である。自然遺産は自然を楽しむ所で，あまり歴史には思いを馳せる場所ではないが，バオバブは例外である。

マダガスカルで有名な動物と言えば，独自に進化した猿類である。キツネザルという名前はそれほど動物好きでなくとも耳にしたことはあるだろうし，アイアイと言えば，日本の子供たちは幼稚園で習う歌として馴染み深い。どちらもマダガスカルと近隣のコモロ諸島の一部でしか見られない固有種である。日本で猿と言えばニホンザルで，茶色の毛で顔には毛がないという点では亜種のヤクシマザルも特に代わり栄えはないし，ほぼ1種類であると言える。しかし，マダガスカルでは，その形，色，大きさ，実に様々である。中には黄金に光る美しい毛皮を持つ種類もいる。ジャングルで生き延びるには保護色であった方がよいかと思うのだが，アフリカ本土と違って大型の肉食獣がジャングルに生息していないため，目立つ色でも生き延びることができたのであろう。

大型の肉食獣がいないということは，観光客にとってもよいことである。アフリカ本土で野生動物を見るには，ジープに乗って自然保護区をひた走り，なおかつ，時に双眼鏡など使って，自分の身の安全を図れる距離を保たなくてはいけない。車には万が一に備えて銃が積んであるし，車から降りて間近で野生動物を観察できる安全な場所はそうそうない。しかし，マダガスカルでの野生動物観察は徒歩である。そして，さほど奥地に行かずとも間近で多くの種類の

野生動物を見ることができる。檻やガラスに遮られず，しかも自然に生活している状態の野生動物を，しかもそこだけにしかいないめずらしいものを手に取るように（実際に肩に載せたりしていた旅行者もいたが）観察できる場所は，世界中でそうそうないであろう。

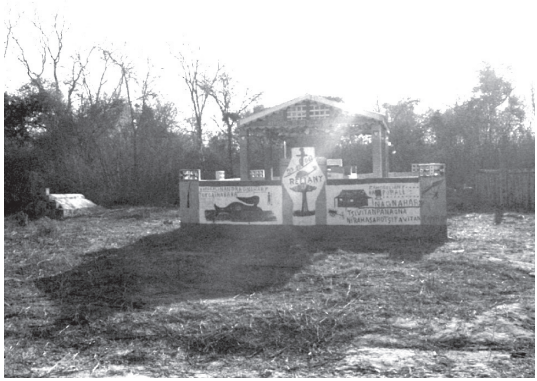
地図を見ていただければおわかりになるように，マダガスカルはインド洋に浮かぶ島である。つまり，国土の外周分，海岸線を持っている。もちろん，日本でも同様だが，だからと言ってすべての海岸がビーチリゾートに適しているわけではない。が，いくつかあるビーチリゾートは自然を破壊するような産業がないため，手つかずのままの自然が残っており，とても美しい。また，多くの海洋生物を育むサンゴ礁も多くあるため，ダイビングにも適している。クジラやマンタ，ジンベイザメなどの大型海洋生物も生息しているし，運がよければシーラカンスに遭遇することもできるかもしれない。実際に，マダガスカル北西のコモロ諸島では1938年の発見以降，200匹のシーラカンスが捕獲されている。

(2) 文　　化

マダガスカルにはマダガスカル語という共通言語があるが，民族は1つではない。マダガスカルにはそれぞれ違った個性を持った18もの民族が共存している。この民族は大きく3つに分けられる。1世紀頃にカヌーに乗ってインド洋を渡ってきたボルネオ系民族，9世紀頃，貿易のためにやってきたアラブ系民族，そして，彼らが奴隷として連れてきた東アフリカ系民族である。代表的な民族としては，メリナ（26%），ベツィミサラカ（15%），ベツィレウ（12%），ツィミヘティ（7%），他にサカラヴァなど。それぞれが異なる文化を持ち，肌の色や顔つきも違っている。マダガスカルはインド洋におけるアジアとアフリカの文化の十字路なのである。

マダガスカルの文化はそれぞれの民族によって違うが，その違いを越えて共通していることは先祖を大切にしていることである。首都アンタナナリヴから郊外に向けて車を走らせると，荒野にポツポツと小さな四角い建物が立っているのが見える。入り口は必ず西を向いている。そして，よく見ると窓がなく，入口は塞がれている。これは家ではなくお墓である。マダガスカルでは一般的

写真 2　お墓



に火葬をせず，死者はランバメナという布を巻かれてこの中に安置される。一般的なお墓の大きさで80人くらい安置できるそうである。この家型のお墓は地方，民族によっていろいろな形がある。たとえば，メリナ族はレンガとコンクリートで作られ，レンガ以外の部分はたいてい，1色で塗ってある。絵が描いてあったとしても，せいぜいクリスチャンであることを表す小さな十字架ぐらいである。しかし，マハファリ族のお墓は全面びっしりと色鮮やかな絵が描かれ，アルアルと呼ばれる木彫とマダガスカル特産のゼブー牛の骸骨で飾られている。このアルアル，バッドより一回り太いくらいの1本の木を彫り込んであり，デザインは墓によって全て違う。死者の生前の生活や仕事をモチーフとしている。遠くから見ると細いトーテムポールのようで，水牛のような大きな角を持ったゼブー牛の骸骨と合わさって，マダガスカルというよりメキシコの雰囲気である。サカラヴァ族のお墓にも彫刻が飾られているが，こちらは性器を誇張した男女がモチーフになっていて，あまりの大胆な表現ぶりに驚かされる。だが，こういった像を好む方も多いらしく，盗難が絶えず，現在ではオリジナルが残っているところは，少ないということである。ベツィレウ族の墓は礫岩の板を積んで作り，ゼブー牛の骨を飾っている。アンタヌシ族の墓もまた，ゼブー牛の骨とオベリスク状の石塔で飾られている。

民族ごとに異なる様々な意匠に富んだ墓にも驚かされるが，主に中央高地に

住む民族の行うファマディハナという伝統行事にはもっと驚かされる。日本の行事にあたるのは七回忌や十三回忌の法事ということになるのであろう。日本では親戚が集まって，僧を招いてお経をあげ，故人を偲びながら会食をする。マダガスカルでも親戚が集まって会食をするのは同じだが，違うところは故人を偲ぶだけでなく，実際に故人を墓から出してくることだ。前述のように，マダガスカルでは亡くなった人は火葬されずに布に巻かれて墓に置かれる。ファマディハナでは，墓に入っている先祖を全員外に出し，古くなったランバメナを外して新しいものに取りかえるのである。このランバメナ，山繭で作った絹が正式なものであるが，家の事情で安いポリエステルが使われることもあるということである。そして，会食は親戚の他，友人，ご近所も招いて三日ほど続く。その間に振る舞われる料理の費用だけでも大変なことである。そのために，時には何十頭もの牛が屠殺され，振る舞われるそうである。

ワールドカップの時，アフリカのいくつかの国がチーム専属の呪術師を同行させていて驚いたが，マダガスカルもまた，呪術的な文化を持っている。前述したマファディファナは自分の家の祖先の霊を慰める行事だが，その他にもトゥンバという霊の存在を信じている。トゥンバには歴代の王たち，その家臣，兵士，奴隷，王に仕える女性たちなど，様々なキャラクターが存在する。また，それぞれの身分によって階級付けられており，固有の名前や衣装，道具を持っている。しかし，その他にも名前のないいたずら好きの子供の霊もいるそうだ。家族が病気になったり，よくないことが起きると，トゥンバと交信できるという霊媒師のところに相談に行く。そして，霊媒師の指示にしたがってトゥンバを慰めるために，儀式を執り行う。そして，この儀式のために霊媒師に高額な礼金を払わなければならないそうだ。トゥンバに祟られるというのは，マダガスカル人にとって相当の恐怖のようで，若いマダガスカル女性に質問するために「トゥンバが」と口に出した途端，「怖い！」と身体をびくつかせていた。

(3) 牛

墓の装飾にもよく使われるゼブー牛だが，マダガスカルでは富の象徴である。牛に対する思い入れは並々ならぬものがあり，国章に使われているくらいだ

が，時には争いのタネにもなる。2012年も牛泥棒が発端で軍隊が出動する騒ぎがあった。そして，あろうことか子どもや障害者を含む村民を村ごと虐殺し，国際社会の非難を浴びた。この事件の真相は未だによくわからないが，「武装化した村民が警察や軍隊の到着を待たずに牛泥棒を何十人も殺害していたため」「村に潜んでいる牛泥棒を制圧するため」などの説明が軍隊からなされていた。いずれの理由でも虐殺を正当化できないが，マダガスカル人の牛に対する思い入れの強さがこの事件を引き起こしたことだけは確かである。

現在，世界で飼育されている家畜牛は大きく2系統に分けられ，1つはヨーロッパおよびアジア北部をその源とするコブなし家畜牛の系統であり，もう1つの系統がゼブーの属するコブウシの系統である。コブウシは耐暑性があり，熱帯性の病気や害虫に対する抵抗力が強い。日本ではまず見られないゼブー牛だが，食してみると思ったより柔らかく美味であった。芸術的なまでに細かく脂肪の入った日本のブランド牛とはさすがに較べるわけにはいかないが，一般的な街の食堂でなら200グラムのステーキがライス，炒め野菜つきで300円ちょっとで食べられる。この値段でこの味であれば，十分に満足できるのではないだろうか。

(4)街 並 み

1960年までフランスの植民地であったマダガスカルには特にアンタナナリヴ，アンツィラベなどの都市部においてフランス風の建物が多く残っている。アメリカ・ニューオリンズのフレンチ・クォーターで見られるようなベランダのついたコロニアルスタイルの建物である。アンタナナリヴでは丘の斜面に沿って建物が並んでおり，道にはパリの裏通りのように石畳が敷き詰められているので，時にモンマルトルあたりを散策しているような錯覚に陥る時がある。市内の中心部では大きく広場が設けられ，多くの街路樹が植えられ，植民地時代の遺物とはいえ，街並みは美しい。

写真 3　アンタナナリヴの街並み

3.今後の課題と可能性

豊富な観光資源を持つマダガスカルであるが，まず，改善しなくてはいけないのはアクセスの悪さである。マダガスカルには鉄道網がない。かろうじて，首都アンタナナリヴとアンツィラベ，トマシナ間を週に（1日にではなく）何本かが結んでいるくらいである。よって，基本的な移動手段は車だが，ほとんどのマダガスカル人にとって車は非常に高価であり，簡単に買えるものではない。

首都アンタナナリヴではブスと呼ばれる乗り合いバスを利用している。バスと言っても大型バンで，通常のバスのような乗降口はなく，バンの後部の観音開きのドアを車掌が中から開け閉めしている。よく半開きのまま出発したりしているので，大丈夫なのかと心配になる。しかし，初乗り3,000アリアリ（約135円）のタクシーと較べ，市バスは市内均一運賃で300アリアリ（約14円）なので，市民の足として非常によく利用されている。問題は特に行き先を明記している訳でないので，近づいてきたバスの車掌に素早くマダガスカル語かフランス語で行き先を尋ねなくてはいけないことだ。また，市バスと言っても100％民間営業，しかもそれぞれのバスが個人営業主といった状態であるので，路線図もなければ，時刻表，バス停すらない。外国人が利用するのは至難の技だ。特に，いつ来るのか，どこへ行くのかわからないバスを待つのは日本人には耐えられないことであろう。そんなに見どころがあちこちに分散しているわけではない

写真 4　バオバブ・アベニュー

ので，市内をくるりと一周できる，観光用のバスルートが整備されればと思う。

また，都市間を結ぶ航空網が非常に脆弱である。マダガスカル観光の目玉であるバオバブ・アベニューのあるモロンダバへ行くには首都アンタナナリヴから飛行機で1時間だが，この便が月水金日の早朝にそれぞれ1往復しかない。土曜日に便がないということは土日を使って旅行できないということである。

しかも，バオバブ街道へ行く道は途中から舗装されておらず，四輪駆動の車でガタガタ揺られながら行かなくてはいけない。年配の方にはさぞや辛いかと思われる。これは他の都市を結ぶ幹線道路（といっても1車線，センターラインもなし）も同様で，舗装されてはいるが，あちこち傷んで時々陥没しており，整備が必要である。

観光地での問題は子供たちが小銭をせがんで観光客につきまとうことであろう。どこへ行っても子どもたちに囲まれてしまう。マダガスカルの大人たちは誰も注意しない。大人たちも現金収入が欲しいのだろう。余計なお世話かもしれないが，子供の頃に施しを受けることに慣れてしまった子どもたちが，どんな大人になるのか心配である。国に予算がないのはわかるが，せめて，バオバブ・アベニューのような観光地には現地係員を配し，観光客が気持ちよく過ごせるように配慮する必要がある。

また，特に清潔好きの日本人にとって耐えられないのは，マダガスカルのトイレ事情である。ＪＩＣＡに勤務する友人から「マダガスカルに行ったら草むらは

絶対に歩いちゃダメ。草むらはみんなのトイレだから」と言われ，まさかと思ったが，実際，都市部においても，トイレは町内にひとつという所も少なくないようだ。そのせいか，昼間でも人通りの多い公道で堂々と立ち小便している男性をよく見かける。また，美しい海岸線に点々とウンチが落ちているのも見かけた。野犬も多いので犬のものかもしれないが，どちらも興ざめである。現地の人は見慣れてしまって何とも思わないのかもしれないが，意識改革が望まれる。

ホテルについて言えば観光地で「高級」と名のつくホテルは日本人でもまずまず満足できるレベルである。たとえば，モロンダバのパレサンドルは一つひとつが独立したコテージになっていて，テーブルセットの置いてある広いバルコニーつきビーチフロントの部屋で食事代3回分含め180,000アリアリ（約8,100円）。

街なかのレストランでもそうだが，コストパフォーマンスは非常に高い。そして，料理もまずまず。マダガスカル料理は米に汁の多いおかずをかけるものが多く，アフリカの他の国ほどスパイシーでないので，日本人の口にも合うと思う。だが，「高級」といわれるパレサンドラでもメニューは残念ながらランチもディナーも同じで全部で8種類しかなかった。週末2日ぐらいの滞在なら平気だが，3日以上となると飽きてくると思われる。

支払いで困るのはクレジットカードの使用できるところが少ないことだ。それなのに，マダガスカルでは最高紙幣の10,000アリアリが，日本円に換算すると450円の価値しかない。仕方なく，旅行中はお財布に入りきれない大量の札束を持ち歩かなければならない。しかも，日本円が換金できるところは特に地方に行くと限られてくるので，いったんユーロかドルに換金していく必要がある。首都アンタナナリヴの空港では使わなかったアリアリを日本円に換金しようとしたら，「足りないから残りはドルにしてくれ」と言われたし，日本円からアリアリに換金しようとした時は市内の銀行を4軒回ってやっと受け付けてもらえた。貨幣の切り下げを行わないのであれば，クレジットカードの普及と，日本円が換金できる銀行が増えてくれることを望む。

最後にマダガスカル人のホスピタリティについて。この国の人たちはよく微笑む。そこにアジアを感じる。これはホスピタリティにおいてよいことだが，微笑んだままで遅々として物事が進まないことがよくある。時間感覚において，日本

人はとてもせっかちなので，少し割り引いて考えなければならないが，マダガスカルの人たちは本当にのんびりしている。現地ではMora mora（ムラムラと発音する）という言葉があるが，直訳すると「ゆっくり，ゆっくり」である。「明日できることは今日しない」という意味らしい。しかし，多くの日本人観光客には時間がなく，今日できることは今日してしまわないと明日は飛行機に乗って日本に帰らなくてはならないかもしれないのだ。相手の望むことを察して先に動くことがよいホスピタリティかと思うのだが，そこまで到達するにはかなり先の話になりそうである。まずは，要求されたことを正確にかつ迅速にこなすこと。

マダガスカルのホスピタリティはこれからである。

おわりに

マダガスカルの首都アンタナナリヴから車で4時間ほど走ったところにアンツィラベというマダガスカル第3の都市がある。フランス植民地時代に整備され今も当時の建物がそのまま残る美しい街である。そこに聖マリア病院という修道院経営の産院があり，2人の日本人シスターが助産師として働いていらっしゃる。そこは曽野綾子氏の小説『時の止まった赤ん坊』の舞台にもなった産院である。日本にはその病院に支援物資を送り続けているグループがあり，最初の訪問のきっかけはそのグループのホームページを見たことだった。「クーデター以来，支援物資を送っても，箱に穴を開けられて中身を抜かれて箱だけしか届きません。誰か日本から粉ミルクを運んでくれる人はいません？ このままだと，助かる命が助かりません」。栄養失調の母親から生まれてくる新生児はやはり栄養失調で，そのままだと命を落としてしまうこともあるが，日本の高品質の粉ミルクを与えるとみるみる元気になるそうだ。悲痛な訴えだった。そして，知ってしまったからには行動せずにいられなかった。早速粉ミルクを2ダース持ってマダガスカルへ飛んだ。シスターからは空のフィルムケースがあったら，それも持ってきて欲しいとの要望があった。何に使うのか不思議に思ったが，粉ミルクを小分けにして母親に渡すためだった。退院した後，毎週，新生児の体重を測りに来させ，増えていたら，また粉ミルクをあげるそうだ。そうし

写真 5　アベマリア病院の助産婦のシスター

ないとそのフィルムケースに入ったわずかなミルクを生まれてきた子に飲ませずに，売って現金にする母親がいるから。「ひどくないですか？」と憤慨していたら，「でも上の子たちにも何か食べ物買ってあげなきゃいけないのよね」という答えが返ってきた。上の子たちを食べさせるために生まれた子のミルクを売る。我が子の命を天秤にかける。どれほどの苦しみだろう。母として究極の選択だ。

たまたま日本で生まれ，日本で育ってきた。それだけでどれほど幸福なことか。本稿を読んでそう感じていただけたら幸いである。

参考文献

小山直樹［2009］『マダガスカル島――西インド洋地域研究入門』東海大学出版会。

飯田卓，深澤秀夫，守山工［2013］『マダガスカルを知るための62章』明石書店。

深澤秀夫，守山工，箕浦信勝，花渕馨也，飯田卓，菊澤律子，ラクトゥマララ，堀内志保，堀内孝，相澤光晴［2006］「特集＝インド洋の十字路　マダガスカル」『自然と文化そしてことば02』胡蘆舎。

国連［2012］世界人口統計。

世界保健機関［2012］世界保健統計。

総務省統計局［2010］国勢調査。

外務省ホームページ（www.mofa.go.jp/mofaj/）。